自然教育園報告（Rept. Inst. Nat. Stu.）
第25号：35-44, 1994.

鹿児島県出水平野におけるツル類の基礎調査　第30報

ツル類の生息状況に関するアンケート調査（平成4年度）

千羽　晋示*・安部　直哉**

Studies of the Cranes in Izumi, Kagoshima, Japan. 30, The Inquiry about the Distribution of Cranes in western and central Japan

Shinji Chiba* and Naoya Abe**

序

第2次・鹿児島県出水平野におけるツル類の基礎調査の第3年目（平成4年度）にも、前年度とほぼ同様の形式でツル類の分布に関するアンケート調査を行った。本報はその結果をまとめたものである。

回答者の多くの方々、詳しい回答をくださった長崎県の大野廣延氏と山村辰美氏、このアンケート調査とは別にタンチョウの情報をいただいた山形県の大沢八州男氏と秋田県の佐々木均氏、熊本県の下津紀代志氏、この調査にも協力いただいた又野末春氏にお礼申し上げる。

調　査　方　法

調査対象期間　1992年秋期のツル類の渡来期から翌1993年春期の渡去期まで（すなわち、1992－1993年期、平成4年度）。

調査対象地域　表1に県名を記した、九州、四国、中国、近畿、中部地方と東北地方の一部を調査域とした。ただし、ナベヅル、マナヅルの定期的な渡来・越冬地である鹿児島県出水地方と山口県熊毛町八代地方は除いた。

アンケート調査の内容　調査用紙の様式と内容は、5年前からほぼ同じである。その調査用紙の形式と内容については、千羽・安部（1989）を参照されたい。ただし、3年前の調査から「鹿児島県出水地方ならびに各回答者の在住地におけるツル類の保護に関する意見」の項を追加したが、報文としてまとめるほどの回答は得られなかったので、本報では扱わなかった。

アンケート調査用紙の発送先　表1に記した各地に在住の日本鳥類保護連盟会員、長崎県生物学会々員、そのほか鳥類研究者、観察者に返信用封筒と切手を付けて調査用紙を送付した。ただし、調査依頼者は

*国立科学博物館附属自然教育園，Institute for Nature Study, National Science Museum
**奈良県生駒郡斑鳩町神南3-9-32-102, Jinnan 3-9-32-102, Ikaruga-cho, Ikoma-gun, Nara-ken

前２年度の回答者とした。なお、未回答者と回答者の一部の方々に再度の問合せを行って、未報告の資料の収集に努めた。

調　査　結　果

調査用紙の回収　各県別の回答者数を表１に示した。調査用紙の発送数は449名、回答者数は404名、回収率は90％であった。なお、表１には記さなかった、調査用紙を送付していない３名の方々（それぞれ秋田県、山形県、熊本県に在住）から有用な情報をいただいた。

調査記録のまとめ方　記録のまとめ方と記述方法は、後々の取りまとめに便利なように、これまでの報文と同じである。本報でも、編著者の「注」を適宜に付記した。

なお、表１に県名は記されているが、以下の記述中に県名の出ていない諸県は、本調査期にはツル類の記録がなかった県である。

表１．県別回答者数

秋田	6	三重	15	徳島	6
山形	1	滋賀	5	香川	7
福島	4	京都	12	愛媛	3
新潟	22	大阪	25	高知	4
富山	7	兵庫	29	福岡	26
石川	7	奈良	8	佐賀	3
福井	4	和歌山	6	長崎	35
山梨	5	鳥取	4	熊本	7
長野	21	島根	4	大分	6
岐阜	18	岡山	2	宮崎	7
静岡	24	広島	15	鹿児島	4
愛知	48	山口	2	沖縄	2

1992年秋期から1993年春期までの記録

秋田県

タンチョウ

(1)1992年10月３－30日頃まで。成鳥１羽。南秋田郡大潟村B地区、山本郡八竜町久米岡新田の水田地帯に生息。

(2)1993年１月４日－３月18日。成鳥１羽。山本郡八竜町久米岡新田の水田地帯で越冬。

(3)1993年３月22日。成鳥１羽。秋田市新屋町、雄物川に出現。３月23日に去る。

(4)1993年３月25日－27日。成鳥１羽。平鹿郡雄物川町沼館の水田地帯。

(5)1993年４月３日。成鳥１羽。南秋田郡大潟村A40地区の水田地帯に出現。

(6)1993年４月上旬から９月27日まで。成鳥１羽。仙北郡中仙町鑓見内、角館町の水田地帯で越夏した。なお、この個体と思われる成鳥１羽が９月27日以後、湯沢市に出現している。

注：この成鳥１羽は秋田県の観察者により同一個体と推察されている。上記（１）の記録より早い1992年８月に南秋田郡大潟村にタンチョウ１羽が出現しているが、生息状況は明らかでない。

和歌山県

ナベヅル

(1)1992年11月８日。１羽（幼成不明）。日高郡由良町の休耕田。

マナヅル

(1)1992年11月１－７日。成鳥１羽。日高郡美浜町の水田地帯。

高知県

ナベヅル

(1)1992年秋期の初めに、４、５羽が渡来の情報。詳しい状況は不明。

(2)1992年11月、１羽。マナヅルと一緒に出現。下記のマナヅル（５）と同じ記録である（以上、(1)、(2)は澤田佳長氏からの聞取りによる）。

マナヅル

下記の(1)、(2)、(3)は1992年10月30日付の「高知新聞」の記事からまとめた。

(1)1992年10月26日。７羽。土佐清水市に今秋初めて渡来。

(2)1992年11月末から12月２日までの記録（月日不明）。幡多郡大方町入野の水田跡にいる６羽の写真が掲載されている。

注：このうち４羽は成鳥、２羽は幼鳥のように見える。

(3)1992年10月29日までに、宿毛市、中村市、幡多郡大方町に７－10数羽の群が記録されている。

以下、（４）－（８）の記録は澤田佳長氏からの聞取り（1992年12月３日）を基にまとめたものである。

(4)1992年11月20日。７羽。土佐清水市に出現。

(5)1992年11月。マナヅル24羽とナベヅル１羽の１群。中村市に出現。そのほか各所に出現し、通算では100羽以上になる。11月15日の狩猟開始以後、20日頃までに各所に分散して、消える。

(6)1992年12月３日現在。成鳥２羽、成鳥１羽と幼鳥２羽の家族の計５羽が中村市に生息中。

(7)1992年11月17日。成鳥１羽の死体発見。この個体は、上記（６）の成鳥１羽と幼鳥２羽の家族の親鳥の１羽と推察される。

(8)同氏によれば、「今期は、少なくとも３群、20羽以上のマナヅルが渡来したようで、これほど多くのマナヅルが渡来した例はない」とのことである。

注：1992－93年期には、中村市で計４羽のマナヅルが越冬したようである。

福岡県

ナベヅル

(1)1993年３月13日、10時。１羽。福岡市西区今津の上空を北に。

マナヅル

(1)1992年11月1日。成鳥(若鳥)1羽。福岡市西区今津。この個体は1993年3月上旬まで同所に生息し、越冬した。

クロヅル

(1)1993年3月5、6日。成鳥1羽。田川郡大任町今任原。彦山川沿いの休耕田。

注：1992－93年期には、鹿児島県出水地方にはクロヅルの幼鳥2羽が越冬したが、成鳥は越冬していないので、この個体は、繁殖期への北上中に迷行したものであろう。

種不明

(1)1992年11月29日。1羽。福岡市西区今津の近くの上空、北東から南西に。

(2)1992年12月13日。30羽。同上所。北から南に。

(3)1993年3月11日、16時40分。36羽。糸島郡志摩町小富士の上空、北西に。

(4)1993年3月13日、17時30分。6羽。同上所の上空、北西に。

佐賀県

マナヅル

(1)1993年2月22日。約100羽。伊万里市二里町八谷搦、有田地区衛生処理場南側の水田跡に降りて休息。23日には89羽、24日には43羽が休息していた。

種不明

(1)1992年11月1日、16時0分、約100羽。伊万里市、烏帽子岳の上空を南下。

長崎県

注：これまでの報文と同じく長崎県の記録は、1．九州本島地域と2．壱岐・対馬地域に分けてまとめた。序文で記したように特に大野廣延氏と山村辰美氏からいただいた回答を基にとりまとめを行った。種不明として回答されている上空を渡るツル類の春期の記録のうち、出水で越冬するマナヅルの大部分がすでに渡去した以後の記録の一部については、編著者の判断でナベヅルとしてまとめた。

1．九州本島地域

ナベヅル

(1)1992年10月24日、15時過ぎ。9羽。諫早市小野島新田の干潟。

(2)1992年10月28日から11月初旬にかけて。諫早市およびその付近の諫早干潟と農耕地。幼鳥1羽を連れている1番いと2羽の幼鳥の5羽。幼鳥2羽を連れている1番い、幼鳥1羽を連れている1番いの7羽。合計12羽。

(3)1992年12月8日。18時30分。7羽(幼成不明)。諫早市小野島新田の干潟。

(4)1992年12月11日。成鳥2羽。同上所の後背地の畑地。

(5)1993年4月1日。成鳥1羽。西彼杵郡時津町西時津郷の農耕地。

注：この個体は、前シーズンの春の渡去期に同上所に出現(1992年6月2日付、「長崎新聞」による)。1992年の渡去期には飛び立てず、同上所で越夏。1992－93年の冬期も飛び立てずに同上所で越冬し、1993年4月1日現在も同上所に生息。この個体は飛び立てないまま、同上所の農耕地にずっ

と生息している。

(6)1993年３月27日、14時０分に128羽。15時40分に50羽、16時０分に６羽の計184羽が北上。佐世保市、港入口に近い俵ヶ浦の山頂で観察。

(7)1993年３月30日、11時48分。約50羽が北上。同上所。

(8)1993年３月30日、11時30分に60羽、12時15分に50羽、12時50分に77羽の計187羽が北上。北松浦郡小佐々町、冷水岳で観察。

注：上記の(６)、(７)、(８)の記録の種名は、出水地方におけるマナヅルの渡去状態(1993年３月27日には、出水地方に残るマナヅルは１羽のみになっていて、この個体は1993年４月２日にも出水に残留していた)から、ナベヅルとした。

マナヅル

(1)1992年10月24日、15時過ぎ。ナベヅルの(１)と同じく、諫早市小野島新田の干潟。７羽。このうちの１羽は左脚に030の標識を付けている成鳥であった。

注：この030の標識を付けている個体は、1992年10月22日に出水に渡来していることが又野末春氏によって観察されていた。出水の鶴渡来地内の文化庁借上げ遊休農地内にツルの塒用水場が完備した月日は、又野氏によれば、本年は10月24日で、この日の夕方から渡来ツルが塒の水場を使うようになったという。そして、この個体は10月25日には、再び出水で観察されるようになったという。

例年、ツルの塒水場が造られるまでの期間には、塒にできる農地の有無、渡来数などとも関連して、毎夕、就塒場を求める混乱飛行や天草諸島方面への飛行が観察される。おそらく、この標識付のマナヅルは、上述の状況下で、出水に渡来後に、諫早干潟に出現し、数日後に出水に戻ったのであろう。

(2)1992年12月13日。５羽。諫早市小野島海岸の後背地を森山町方向に飛行。

(3)1993年２月12日、14時50分。７羽。佐世保港入口付近の上空から平戸方向へ(佐世保市船越町、石岳で観察)。

(4)1993年２月13日、13時20分。298羽。13時55分、45羽。佐世保港入口付近の上空から平戸方向に(同上所で観察)。

(5)1993年２月20日、12時５分。12羽。海岸に降りる(正確な場所は不明。石岳で観察)。

12時過ぎ、50羽。平戸方向へ。

13時38分、８羽。平戸方向へ(これらの記録も石岳で観察)。

(6)同日、12時０分。８羽。長崎市上空に出現。

(7)同日、17時０分。100羽。佐世保市相ノ浦上空を南下。

(8)同日、17時10分。60羽。佐世保市北西部上空を南下。

(9)1993年２月20日、夕方。65羽。東彼杵郡波佐見町岳辺田郷の水田跡。このなかにM40、41、42、43の標識鳥が入っていた(1993年２月27日付「読売新聞」による)。

(10)1993年２月21日、午後に、これらの鳥は諫早市小野島地区の農耕地に移った(２月27日付「読売新聞」による)。

注：1993年２月23日付「長崎新聞」によれば、上記(９)のM40－43の標識鳥を含む67羽が２月21日に波佐見町岳辺田郷で観察された。月日と羽数は上記(９)と異なっている。

1993年３月１日付「長崎日日新聞」によれば、1993年２月21日、13時半過ぎ、諫早市小野島地区の諫早平野にマナヅル63羽とナベヅル15羽が飛来した、という。

標識を付けた山階鳥類研究所ならびに日本野鳥の会から、M40、M41、M42、M43の標識記録はまだ公表されていないが、これらは番いの２羽とその幼鳥２羽のようである。そして、M41は雄成鳥、M42はその幼鳥で、この２羽には発信機が付いていた。

⑾1993年２月26日・M40－43の４羽は、出水に戻っているのが観察された。

⑿1993年２月21日、12時頃。78羽。佐世保市大潟町の陸上自衛隊相浦駐屯地に降りて休息していた。同日夕方まで、訓練場の上空を旋回したり、草地に降りたりしていた。このなかに、A73、A74、A76、M30の標識鳥が入っていた。

この群は２月20日夕方に同上所に降りたようで、２月22日には、同駐屯地の近くにある江楯池との間を飛び交っていた。

注：又野氏によれば２月20日には354羽のマナヅルが出水を渡去している。上記(９)－(12)の群は、出水を出発した一部の個体が悪天候のために渡りを中断したものと、天気図から推察できる。

そして一部の個体は、途中で休息後に北上し、他の一部の個体は出水に引き返している。

種不明

⑴1992年10月27日、17時17分。４群52羽。北松浦郡小佐々町の上空を南下。

⑵1992年11月１日、16時40分－17時０分。150羽。長崎市稲田町の上空を南東に。

⑶同年同日、16時32分。188羽。佐世保市相ノ浦の上空を南下。

⑷1992年11月５日、16時35分。57羽。同上所の上空を南下。

⑸1993年２月20日。８羽。長崎市三景台町の上空を北に。

⑹同年同日。23羽。平戸市下中津良町の上空を東から北東に。

注：出水における渡去記録から推察すると、(５)と(６)の記録はおそらくマナヅルであろう。

⑺1993年３月３日、13時30分に47羽、14時23分に26羽と23羽、14時30分に25羽、14時32分に６羽、合計127羽。佐世保市船越町、石岳と付近の上空を北に。

⑻1993年３月４日、13時５分に150羽、13時20分に25羽と８羽、13時27分に28羽、13時35分に18羽、14時35分に38羽、15時５分に13羽、合計280羽。同上所。

⑼1993年３月５日、13時30分。100羽。同上所。

⑽1993年３月８日、15時36分。36羽。佐世保市大島町の上空。

⑾同年同日、15時50分。40羽。佐世保市上本山町の上空。

⑿1993年３月９日、13時40分に約100羽、14時２分に約120羽。佐世保市大島町の上空。

⒀同年同日。18羽。諫早市中田町の上空を北西に。

⒁同年同日、14時40分。６羽。佐世保市船越町、石岳と付近の上空。

注：⑽と⑾の記録は、出水における渡去記録によれば、おそらくマナヅルである。⑿、⒀、⒁の記録も、出水における渡去記録によれば、大部分はマナヅルかもしれないが、出水における渡去羽数とかなり相異がある。

⒂1993年３月20日、14時。23羽。平戸市下中津良町の上空、東から北西に。

⒃1993年３月21日、12時過ぎ。第１群89羽、第２群43羽。長崎市弥生町の上空を北に。

⒄同年同日、13時５分に130羽、13時15分に120羽、合計250羽。佐世保市船越町、石岳と付近の上

空を北に。

2．壱岐・対馬地域

両島の記録をあわせて季節順に示した。種名が記されていない記録は、種が判定されていない記録である。

(1)1992年10月16日。12羽。下県郡厳原の上空。

(2)1992年11月1日、14時過ぎから1,000羽以上のナベヅルとマナヅル。下県郡厳原の上空を渡る。

(3)同年同日、15時から約30分間に50－200羽の群が1－2分置きに南方に渡る。下県郡美津島町、白岳の上空。

(4)1992年11月2日、17時。60羽。下県郡美津町大船越の上空を南東に。

(5)1992年11月3日、10時頃。約35羽。壱岐郡石田町印通寺の上空を旋回。

(6)1992年11月4日(時刻の記録なし)。約100羽。壱岐郡郷ノ浦町小牧西の上空を北から南に。

(7)1992年11月25日、14時。約150羽。上県郡上対馬町比田勝の上空を南に。

(8)1992年12月12日、17時過ぎ。約30羽。壱岐郡石田町深江田原の水田跡に降りて泊る。

(9)1993年2月5日(時刻の記録なし)。マナヅル成鳥2羽。壱岐郡郷ノ浦町上空を南から北に。

(10)同年同日、12時過ぎ。約50羽。壱岐郡石田町深江田原の上空を南から北に。

(11)1993年2月5日、夜間に到着。2月6日、8時40分。マナヅル46羽。上県郡上県町佐護の水田跡。11時過ぎに北に渡る。

(12)1993年2月6日、15時。16羽。上県郡上県町、仁田ダムの上空を北に。

(13)同年同日、13時過ぎと17時過ぎ。マナヅル33羽。壱岐郡石田町深江田原の水田跡に降りている。

(14)1993年2月7日、9時30分。同じ群が同上所に滞留中。

(15)同年同日、8時10分、マナヅル約120羽。上県郡上県町佐護の水田跡に降りている。8時20分に北へ渡る。

(16)1993年2月25日、16時。3羽と4羽の計7羽。壱岐郡石田町深江田原の上空を北へ。

(17)1993年2月26日、9時20分。約30羽。壱岐郡石田町深江田原の水田跡から飛び立ち、北に。

(18)1993年3月4日、8時10分。マナヅル約120羽。上県郡上県町佐護の水田跡に降りている。8時20分、北に渡る。

(19)1993年3月5日、8時。マナヅル成鳥8羽。上県郡上県町佐護の水田跡に降りている。発信機の付いている1羽がいて、たえず発信機をはずそうとしている。他のツルにくらべると確かに疲れているようであった。見ていたらひざまづき座りこんだが、ツルが座りこむのは初めて見た。ストレスもだいぶたまっているのではと思った。

(20)1993年3月7日。マナヅル1羽。上県郡上県町佐護体調が悪いのか、しばらく残留。

(21)1993年3月10日、8時過ぎ。ナベヅル7羽。上県郡上県町佐護の水田跡。昨夜はずいぶんツルの鳴声がしたので、他の鳥は朝早く渡ったと思われる。

(22)1993年3月30日(時刻の記録なし)。ナベヅル約120羽。下県郡厳原町久田の上空を渡る。

熊本県

ナベヅル

(1)1992年11月27日。5羽の1群。天草郡河浦町の水田跡に飛来し、同年12月12日まで同所に生息。

(2)1993月２月13日、11時頃。約300羽。天草郡河浦町の上空を北西に。

マナヅル

(1)1992年11月13日、16時。成鳥２羽と幼鳥１羽の家族。天草郡河浦町の水田跡。

(2)1992年11月17日。４羽。同上所に同年11月21日まで生息。

(3)1993年１月下旬から２月下旬まで。成鳥１羽(下記のクロヅル成鳥１羽と一緒に生息)。八代郡鏡町野崎、竜北町の農耕地(不知火干拓)に生息。

クロヅル

(1)1993年１月下旬から２月下旬まで。成鳥１羽(上記のマナヅル成鳥１羽と一緒に生息)。八代郡鏡町および竜北町の農耕地に生息。

種不明

(1)1993月２月20日、14時。１羽。本渡市楠浦町の上空。

(2)1993年３月８日(時刻の記録なし)。37羽。戸島上空より北西に(牛深市深海町、六郎次山で観察)。

沖縄県

ナベヅル

(1)1992年11月７日に発見後、1993年１月６日まで。成鳥１羽。中頭郡金武町の水田跡。同地一帯で越冬した。水田が狭いので、採食後は米軍基地内に移動して、同基地内で就塒を続けていた。

前年期(1991－1992年期)の記録の補遺

山形県

タンチョウ

(1)1991年12月下旬から1992年３月初にかけて、成鳥１羽が酒田市小牧地区、遊摺部地区、東田川郡余目町下堀野地区、飽海郡平田町砂越地区、同郡松山町中牧田地区などの水田跡、最上川河原などで主にオオハクチョウの群と一緒に生息し、越冬した。

注：タンチョウに関するこの山形県における1991－92年期の記録と秋田県における既述の1992－93年期の記録が同一個体かどうかは明らかではない。

熊本県

マナヅル

(1)1991－92年の冬期に、１番いが八代郡竜北町、不知火干拓の農耕地帯で越冬した。

結　　び

1．本年度のアンケート調査によって、1992－1993年期には、秋田、和歌山、高知、福岡、佐賀、長崎、熊本、沖縄の各県からのツル類の記録が得られた。

2．タンチョウの成鳥1羽が、前年期(1991－92年期)には山形県で越冬し、本年期(1992－93年期)には秋田県に成鳥1羽が出現した。この個体は一時生息状況が不明な期間があるが、同県内で1992－93年の冬を越し、続いて1993年も同県内で越夏した。

これらの記録は、近年の本州における珍しい生息例である。山形県の記録と秋田県の記録が同じ個体かどうかは不明であり、また、これらの個体がどこから渡来したかも明らかではない。しかし、近年の北海道におけるタンチョウの越冬羽数の増加傾向との関連でも注目すべきものであろう。

3．春の渡りの途中で、1993年2月20日、21日に観察された発信機を付けたマナヅル(長崎県・九州本島地域の項の(9)、(10)、(11)のマナヅル)と標識鳥(同じく(12)のマナヅル)は、詳しくはここでは記述しないが、1993年2月20日、21日の天気図から推察して、北上の途中で天候の悪化により渡りを中断した例であろう。

出水での観察でも、出水を出発後、数時間後の13時前後に戻って来るマナヅルの例は稀ならず観察されているので、これらも、そのような事例であろう。ただし、注意すべきことは、壱岐・対馬地域の項の(19)の例が示すように、発信機を装着されてからさほど日を置かずに北帰行を始めるマナヅルの一部の個体には、発信機の装着が渡りの飛行にかなり障害になっている例もあるであろう。したがって、天候の悪化による渡りの中断状況、休息後に渡りを再開するまでの期間の日数、渡りの中継地と見なされている朝鮮半島やロシアのある地域での滞留日数などは、おそらく、この発信機装着の悪影響が多少なりとも関係していると考えられる。

4．1992－93年期には、秋田県でタンチョウ1羽、高知県でマナヅル4羽、福岡県でマナヅル1羽、沖縄県でナベヅル1羽が越冬した。さらに、長崎県では、飛行できないナベヅル1羽が越冬した。

5．出水平野に渡来し越冬したものではないクロヅル成鳥1羽が福岡県に春の渡りの時期に現れ、熊本県にクロヅル成鳥1羽が1月下旬から2月下旬まで生息していた。

文　　献

千羽晋示・安部直哉．1989．鹿児島県出水平野におけるツル類の基礎調査　第16報．ツル類の生息状況に関するアンケート調査(昭和62年度)．自然教育園報告，20：41－48.

大沢八州男(安部宛私信．日本野鳥の会・山形支部報「やませみ」29(1992)を含む).

佐々木均(安部宛私信．記録写真，「群雀」68(1992)－80(1993)を含む)。

下津紀代志(安部宛私信．地図，記録写真を含む).

前報の誤植訂正(鹿児島出水平野におけるツル類の基礎調査、第29報．自然教育園報、第24号：33－39、1992.)

(1)35頁，福岡県のナベヅルの項。1羽はM9の標識リング……。－M9の、を削除する。

(2)36頁、上4行目。南高来郡を北高来郡に正す。

(3)36頁、上9行目。佐世保市小佐々町を北松浦郡小佐々町に正す。

(4)37頁、下1行目。(37)を(38)に、(38)を(39)に正す。

(5)38頁、上1行目。(39)を(40)に正す。上2行目、(37)を(38)に正す。

(6)引用文献の項の3行目。第26報を第27報に正す(なお、本誌23号が同じく誤植になっている)。